

「どん底」の思い出

貝沼 一郎
かいぬま いちろう

「どん底」についてなにか書いてくれと言う。ゴリリキーの専門家でもない私は

もちろんお断りしたのだが、「ロシア語研究会」の顧問として何か書いてもらわないと困る、とのたつての要請である。顧問というものはつらいものであるとはじめて感じた。

「どん底」についてはもちろん、ゴリリキーについても、あまり知らない私は当惑したのだが、そこは「ロ研」の幹事も見抜いたものと見えて、では「どん底」についての思い出でもいいと譲ってくれた。

思い出でもいいというなら、ないわけ

でもない。いやむしろ今に鮮烈な思い出があるといった方がいいかもしれない。

ゴリリキーについては今から四〇年ほど前（いやはや年齢をとつたものだ）、東京外語の一年生の二期期かなにかに、「二人の男とひとりの女」というのを、今は亡き奥村泉先生がテキストにとりあげられたことがある（一年目の二期期に！）。良く原文は理解できなかったにしろ、ゴリリキーの作品の力のようなものには強く打たれた思いがある。

二年目の秋、最上級生の四年生が語劇大会で「どん底」を演じた。天井の低い、バラック建ての講堂が舞台で、舞台が低

く、中ほどから上しか見えないという状態であったが、講堂は学生や学外者（各

国大使館員たちも含めて）で満員、一種の熱気のようなものがもれていた。幕が開いてしばらくすると例の「どん底」の歌がひびいてきた。もう私は感激しはじめていたようであった。衣装も照明も演技も当時の私にとってはすばらしいものであった。確かに劇を見ているという感じであった。私はすっかり感激した。そして自分がロシア語をやっているということに或る種の誇りを覚えたことは否めない。私はその後少しは芝居を見たが（数回の「どん底」も含めて）、外語の語劇に

うけたような強い印象をうけたことは少ない。

フランス語科の演じたユーゴーの「エ
ルナニ」、支那語科（当時はそう言った）
の京劇？などは今でもその舞台、演技、
台詞のやりとりなど忘れることはできな
い。これは私が感激しやすい若年の頃の
ためであつたからでもある。しかしこ
ういう劇を原語で自分たち学生がやっ
ているという一種の充実感もたしかに加
わつていたと思う。

「どん底」は見ても、聞いても、面白い（と
言つては語弊があるが）芝居である。
その中に人生の真実を見るも良いし、台
詞の妙味（これもこの劇の重要なモメン
トである）に感心するも良い。

すでにチエーホフの劇二編を演じたこ
とのある先輩の後をうけての今度のロシ
ア語研究会の、松本忠司先生のご指導に
よる「どん底」の上演が大成するよう
祈つて止まない次第である。

【一九七三年記 再録】

Рюмин. С юга. Первый р
Юлия Филипповна!
Юлия Филипповна. В се
вел Сергеевич. — пожалуй,
Двоеточие. Пойду в комн
я тебе на прощанье конфет
Басов.

Я видел море.
Очами жадны
И силы духа м
Перед лицом

как? Идите в дом, жена буде
Рюмин. Там хорошо! Разв
азить красоту и величие м
увствует себя маленьким —
перед лицом вечности.

(Из-за угла дома выходит Варвара Михайловна.)

Басов. Я соберу шахматы. Варя, приехал Павел Серге
ич, знаешь?

